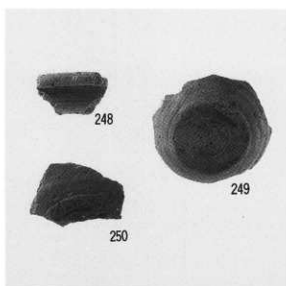
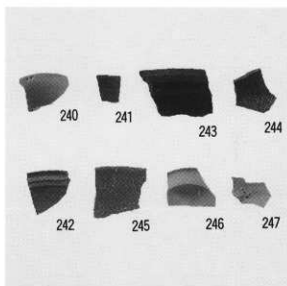


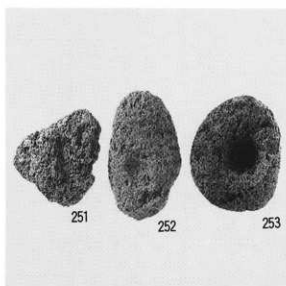
包含層出土遺物 (古代)



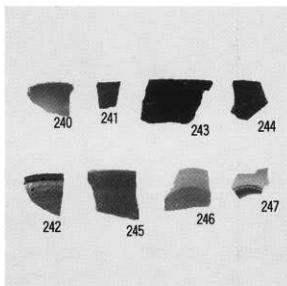
S11・SC2出土土器



SE3・4及び包含層出土遺物 (内)



S11出土軽石製品



SE3・4及び包含層出土遺物 (外)



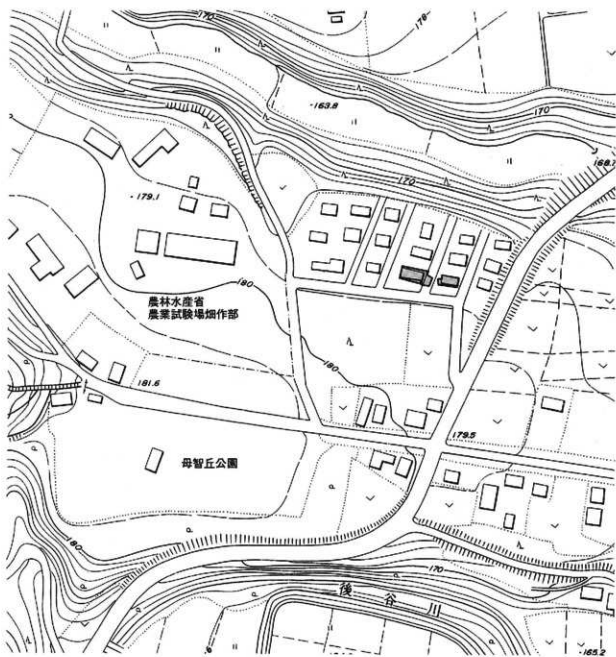
①区検出土坑内柱穴出土銭貨

第IV章 母智丘原第2遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査の経過

本調査は、九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴う九州農業試験場職員宿舍建設予定地240㎡を対象として平成10年1月19日から行なった。調査区の設定は、調査予定地の北側に隣接する宅地への通路を確保する必要があったため通路を挟んで東と西に分割し、西側をA区、東側をB区として調査を開始した。



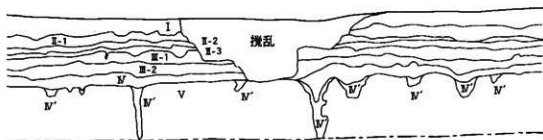
第48図 母智丘原第2遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)

調査は先ず重機により表土約20cmの除去を行なった。表土直下の第Ⅱ層上面から土師器片がまばらに確認されたため、人力で第Ⅱ層を掘り下げた後第Ⅲ層の暗褐色土層上面で遺構の検出を行なった。ただしⅢ層までは取り壊し前の建物の基礎や配水管などの影響を著しく受けており、調査範囲も狭小であったため、遺構の全体像を把握することは困難であった。検出した遺構はA区で竪穴住居跡1軒、B区で掘立柱建物跡2棟、その他ピット群である。竪穴住居跡は南側と東側の大部分が調査予定地外に広がっていたため、南側の廃土置場と東側の通路の半分まで調査区を拡張し検出を行なった。掘立柱建物跡2棟についても建物の柱列が調査予定地を超えて南側と東側に延びる可能性があったため、調査の時間的な制約により柱配置を予想して部分的な調査区の拡張に止めて遺構の広がりを確認した。その結果東側への延びは認められず、南側への広がりが確認された。Ⅲ層上面検出遺構の記録作業と並行して、1月28日からⅢ層の人力による掘り下げをA区、B区の順に行なった。掘り下げ完了後Ⅳ層上面で遺構の検出を試みたが確認できず、遺物もほとんど出土しなかった。Ⅳ層除去後御池ボラ層のⅤ層上面で再び遺構検出を行なったところ、A区で土坑3基、B区で土坑4基、その他多数のピットを確認した。検出した各遺構の実測、写真撮影などを行なった後空中写真撮影を実施し、平成10年2月13日に現地調査を終了した。

2. 基本層序 (第49図)

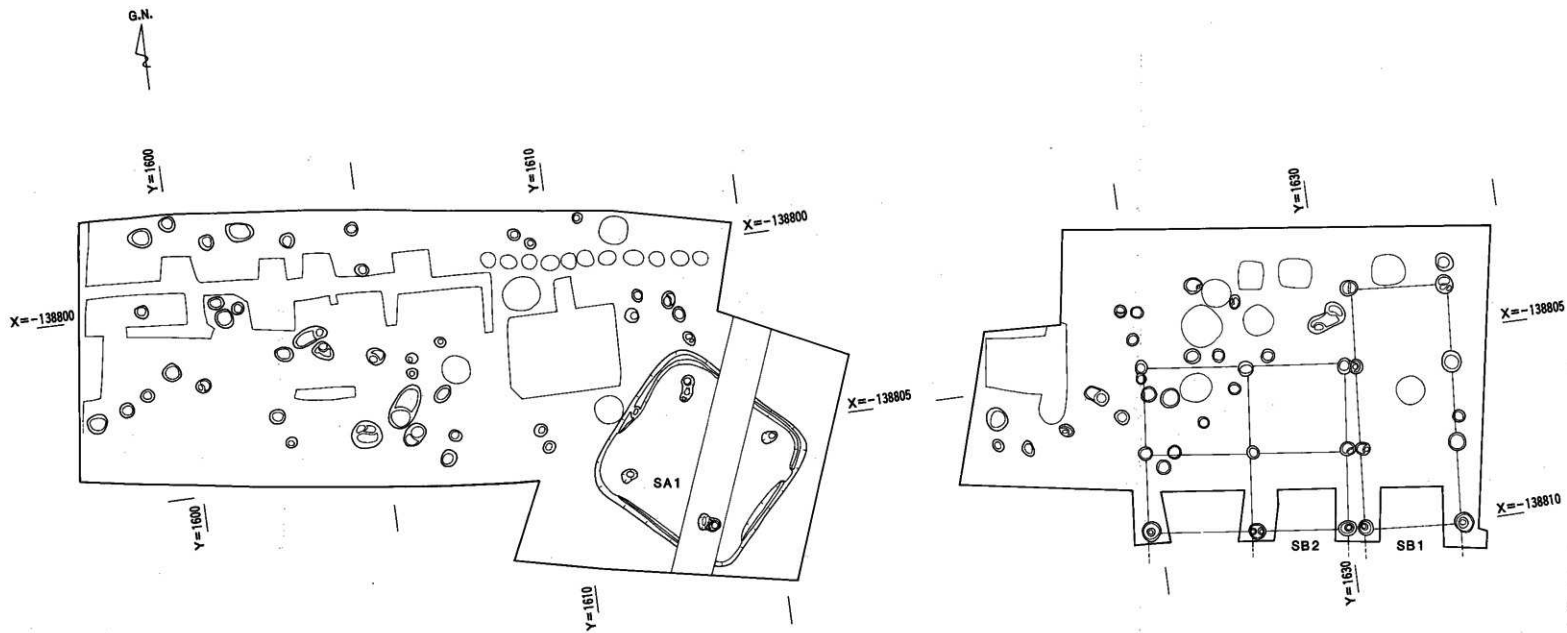
母智丘原第2遺跡の土層観察は、B区の東端にトレンチを設定して行なった。土層の堆積は比較的良好であったが、トレンチの中央部が攪乱土坑による影響を大きく受けていた。以下、堆積状況についてみると、宅地造成土の下には灰白色を呈する文明降下軽石いわゆる「白ボラ」粒を含む黒色土層が20cm程度堆積していた。軽石粒の混入の割合および土の硬さにより、上下2層に細分できる。上層は軽石粒がまばらに混入し硬質の層で、下層は軽石粒が密に混入し若干の締まりのある層である。黒褐色の漸移層を経て御池降下軽石いわゆる「御池ボラ」粒を含む暗褐色土層が30cm程度堆積する。この層も軽石粒の混入割合と硬度により2層に分けられる。上位層は軽石粒が少量混入し、締まりも強くない。下位層は軽石粒の混入が多く締まりがある。その下には御池ボラが密に混入する硬質の黒褐色土層が10～20cm堆積している。確認した最下位層は御池ボラの層で、堆積は厚く1mを超える。

179.50m

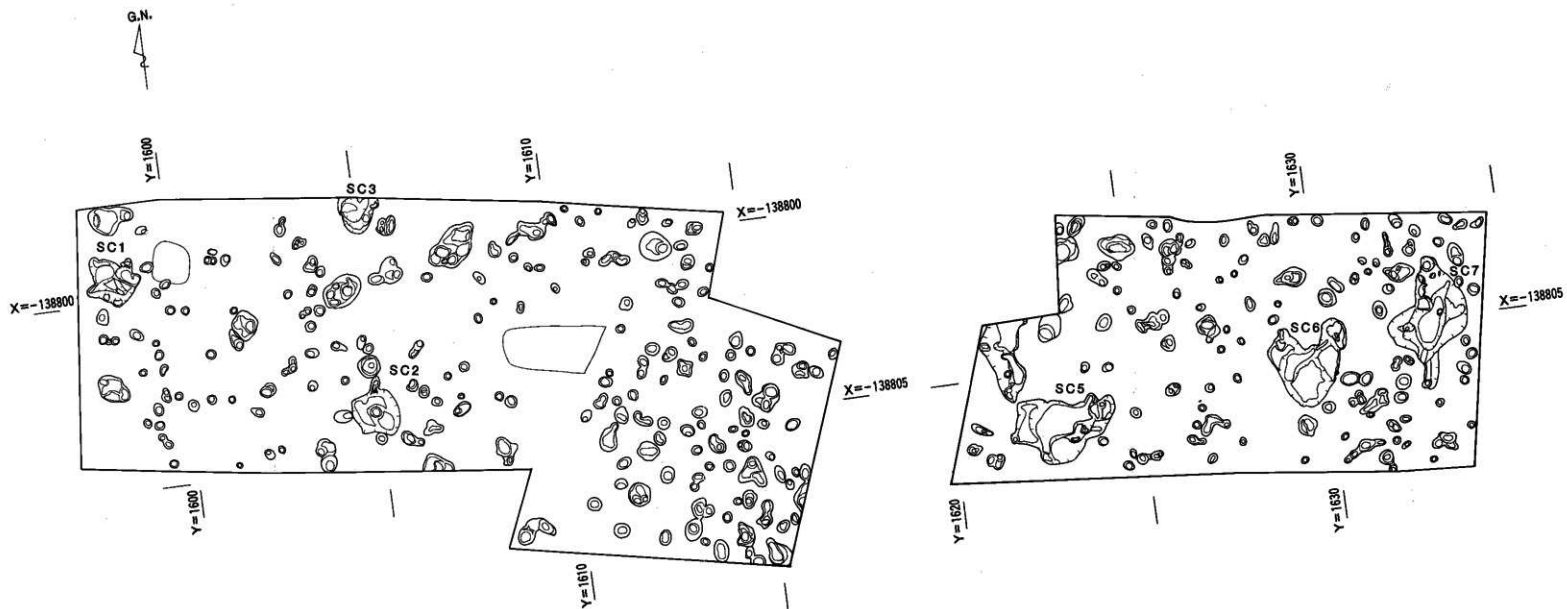


- | | | | | | |
|-----|------|-------------------------|-----|-----------|----------------------------------|
| I | 表土 | | Ⅲ-1 | 暗褐色土 | 2～8mm御池ボラ少量混入。粘性あり。 |
| Ⅱ-1 | 黒色土 | 2mm白ボラ少量混入。 | Ⅲ-2 | 暗褐色土 | 2～10mm御池ボラ多く混入。粘性あり。 |
| Ⅱ-2 | 黒色土 | 0.5～5mm白ボラ密に混入。 | Ⅳ | 黒褐色土 | 1～4mm御池ボラ密に混入。8mm御池ボラ少量混入。硬く締まる。 |
| Ⅱ-3 | 黒褐色土 | 2mm白ボラ・御池ボラ少量混入。粘性若干あり。 | Ⅴ | 黒褐色土+御池ボラ | |
| | | | | 御池ボラ | |

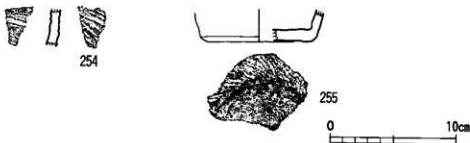
第49図 土層断面図



第50図 遺構配置図1(Ⅲ層上面) (S=1/100)



第51図 連続配置図2(V層上面) (S=1/100)



第52図 包含層(Ⅳ層)出土遺物実測図 (S=1/3)

第2節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物を伴う遺構は確認できなかったが、遺物単独では貝殻条痕施文の縄文土器がB区中央部のⅣ層から2点出土している。

254は深鉢の胴部片である。器面調整は内外面ともに貝殻条痕である。255は深鉢の底部である。薄手の平底を呈する。外面に斜め方向の貝殻条痕をのこす。底部および内面はナデにより仕上げられている。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

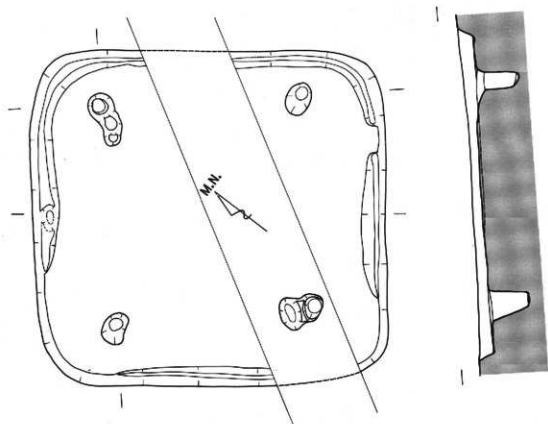
古墳時代の遺構はⅢ層上面から甕および壺を伴う堅穴住居跡を1軒検出した。そのほか遺物包含層から高坏、鉢、須恵器の甕などが出土している。

SA1 (第53図)

A区の東端で検出した。住居跡の中央には遺構を東西に分断するように幅1.1mの側溝が通っており、床面まで影響を及ぼしている。住居跡の平面プランは隅丸方形を呈し、規模は長軸4.60m、短軸4.45m、床面積16.25㎡を測る。主軸方位はN39°Wを指す。埋土は暗褐色土で御池ボラ粒を含む。床面は西側にかけて若干傾斜するもののほぼ水平を保つ。検出面からの深さは最深0.20mを測る。壁際には床からの深さ8cm前後の壁帯溝を廻らす。東側隅と西側隅および南東壁際の一部が途切れる。主柱穴は4基検出した。住居跡の主軸に平行して方形に配置されており、柱間隔は2.7m前後である。床面に硬化面、焼土は確認していない。

出土土器 (第54図 256~262)

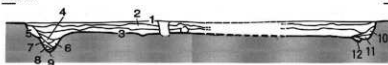
住居跡からは壺(256~258)および甕(259~262)がいずれも床面から5~20cm程度浮いた状態で出土している。256は壺の口縁部である。頸部に刻目貼付突帯を廻らせ、刻目には布目痕が認められる。内外面ともに横ナデ調整である。257は壺の肩部である。一条の貼付突帯を廻らせている。内外面ともにナデ調整である。258は壺の底部である。粘土塊を貼り付け肥厚させた平底である。外面および底部にミガキが施されている。259は甕の口縁部である。胴部から口縁にかけてくびれを持たずに僅かに内湾しながら立ち上がるもので口縁部に一条の刻目突帯を廻らす。器面調整は内外面ともにナデが施されている。260、261は甕の胴部である。261は159に類似した口縁形態をとるとされる甕の胴下半部である。内外面ともにナデ調整である。262は平底の甕の底部である。ナデにより器面調整を行なっている。底から胴下半部にかけて煤が付着している。



178.4m

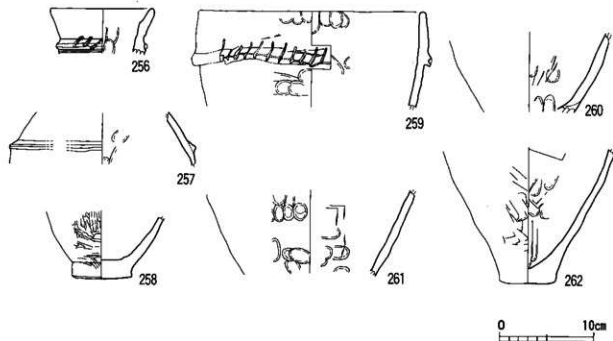


178.4m



- 1 暗褐色土 御池ボラ極少量混入。粘性あり。しまり若干あり。
- 2 暗褐色土 御池ボラ少量混入。粘性若干あり。しまりあり。
- 3 黒褐色土+暗褐色土 御池ボラ多量混入。しまりあり。
- 4 暗褐色土 御池ボラ少量混入。粘性あり。
- 5 黒褐色土 御池ボラ多量混入。粘性若干あり。しまりあり。
- 6 黒褐色土 御池ボラ少量混入。しまりあり。
- 7 暗褐色土+黒褐色土 粘性若干あり。しまりあり。
- 8 黒褐色土+暗褐色土 しまりあり。
- 9 黒褐色土 御池ボラ多量混入。しまりあり。
- 10 暗褐色土 御池ボラ多量混入。粘性若干あり。
- 11 黒褐色土 御池ボラ少量混入。しまりあり。
- 12 黒褐色土 御池ボラ多量混入。しまり若干あり。

第53図 SA 1 (S=1/50)

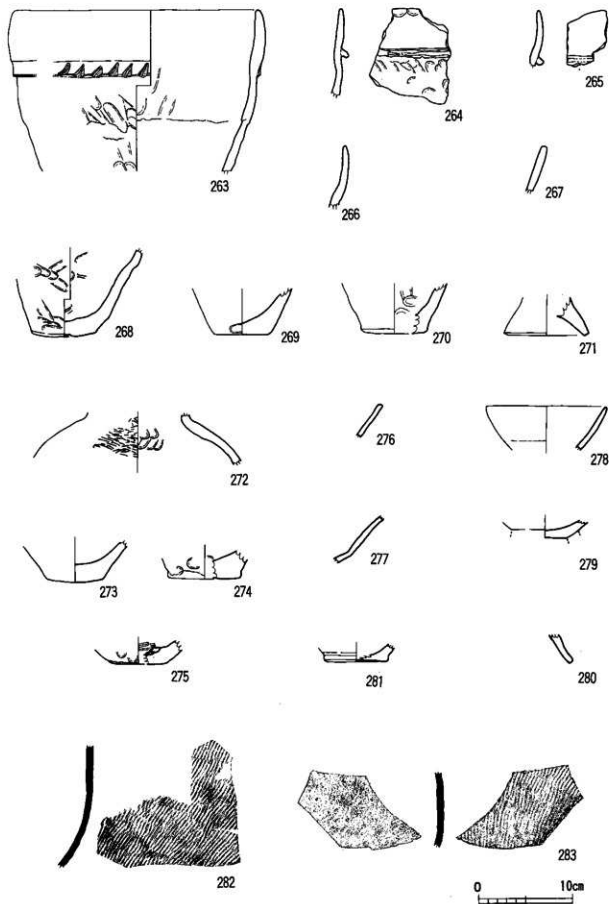


第54図 S A 1出土遺物実測図 (S=1/4)

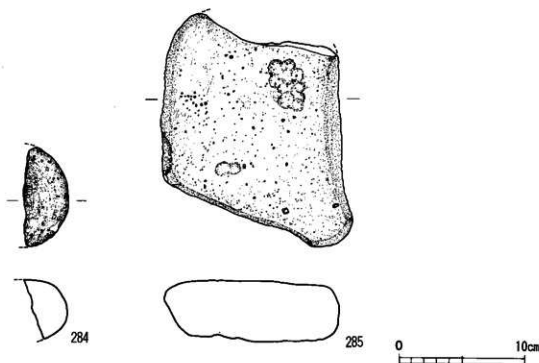
包含層出土遺物 (第55図 263~283) (第56図 284, 285)

分布状況は、A区の南から西寄りにかけてとB区の北西側および中央付近から東側にかけて比較的集中して出土している。土器は300点ほど出土しており、そのうち21点を図示した。出土土器の大半を甕が占める。石器は2点のみ出土している。

263~267は甕の口縁部である。頸部に貼付突帯をもつもの(263~266)が多い。263は胴部から口縁にかけて僅かにくびれ、肥厚する口縁が若干内湾しながら立ち上がる。口縁と胴部の境に一条の刻目突帯が廻り、刻目には布目痕を残す。内面には明瞭に粘土の接合痕がみえる。器面調整は内外面ともにナデが施されている。264は胴部から口縁にかけて僅かにくびれるが、口縁は肥厚せず直線的に立ち上がる。くびれ部外面に一条の突帯を貼り付けるが、刻みは施さない。胴部には煤が厚く付着している。265は内湾しながら立ち上がる口縁部に貼付突帯を廻らせている。口唇部まで厚く煤が付着する。266は265と同一形態と思われるが、突帯は付かないかもしれない。267は外傾しながら直線的に立ち上がる。外面には口唇部まで煤が付着する。268~271は甕の底部である。平底のもの(268~270)と脚台状を呈するもの(271)がある。すべて器面調整はナデが施されている。壺は4点(272~275)図示した。272は肩の強く張る器形の頸部~肩部である。外面に斜め方向のミガキが施されている。273~275は平底の底部である。273は底に若干丸みを帯びる平底を呈する。外面の一部にミガキが施されている。272の肩部に繋がるものと思われる。274は平底を呈し、底端部に粘土の返りがみられる。内外面ともにナデが施されている。275は端部が若干丸くなる平底を呈する。外面にはナデが施され、内面は横方向の刷毛目調整である。高坏は2点(276・277)出土した。276は直線的に外傾する口縁部で、内外面ともに丁寧なナデが施されている。277は坏部片である。口縁部と受部の境に明瞭な稜線をもち、口縁が外反する。器面調整は内外面ともに丁寧なナデである。高台付椀は3点(278~280)図示した。278は外上方に僅かに内湾気味に開く口縁部で外面下端には脚台部接合の痕がみ



第55图 包含层出土遺物実測図 (S=1/4)



第56図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

られる。器面調整は外面にナデ、内面に丁寧なナデが施されている。279は底部で外面下端には脚台部接合痕を明瞭に残す。外面にはナデ、内面には丁寧なナデが施されている。280は脚台部で内外面ともに横方向のナデが施されている。281は円盤状高台をもつ碗の底部である。高台の端部は僅かに斜めに張り出し、端部に明瞭な稜線をもつ。須恵器の出土量は少なく、甕の胴部2点(282・283)を図示した。ともに外面は斜め方向の平行叩き、内面は同心円当て具痕がみられる。

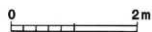
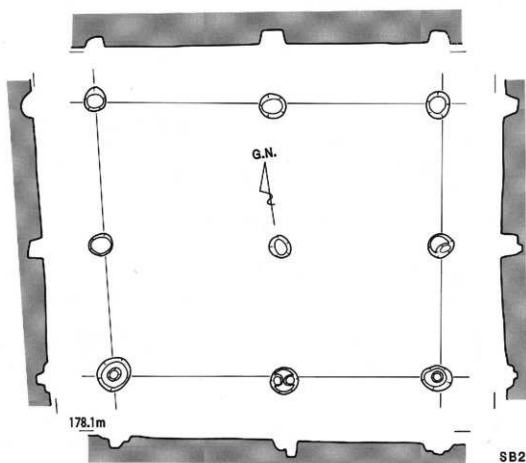
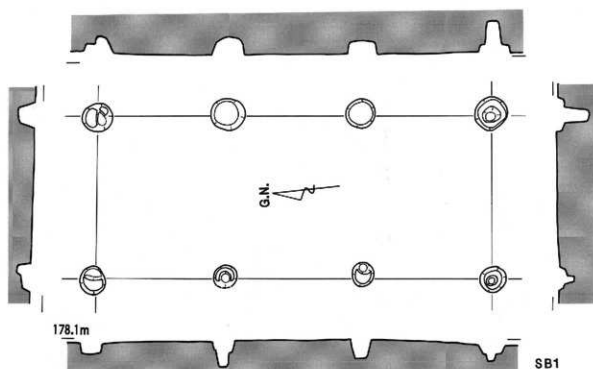
284は溶結凝灰岩製の磨石である。全面に細かな擦痕を残す。285は輝石安山岩製の台石である。平坦面に敲打痕を残し、一部に擦痕がみられる。

第4節 時期不明の遺構

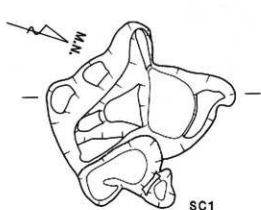
B区のⅢ層上面で掘立柱建物2棟を確認した。また、V層上面を検出面としA区から3基、B区から4基の土坑を確認したが、いずれも共伴する遺物が出土していないため時期の特定はできない。

SB1 (第57図)

B区の東端で検出した。桁行3間梁行1間の長棟構造であるが、桁行は調査区外へ南方に延びる可能性がある。棟方位はN4°Eの南北棟である。規模は桁行6.20～6.25mで、柱間は東側柱が北から2.05、2.10、2.05m、西側柱が北から2.05、2.15、2.05mを測る。梁行は3.00mを測る。柱穴の掘形は東側柱列がそれぞれ径0.55m前後、東側柱列が径0.35～0.45m前後の円形を呈し、概して東側柱列の径が西側柱列の径を上回る。東側柱の北から第2柱と第3柱を除く他の柱穴は二段掘りである。柱穴の検出面からの深さは0.35m程度のものが多いが、西側柱列の北から第2柱は0.50m、最も深い東側柱列の第4柱は0.63mを測る。

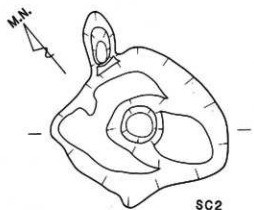


第57圖 SB1・SB2(S=1/60)



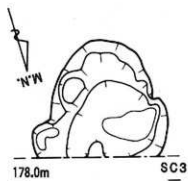
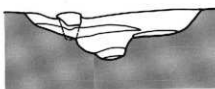
178.0m

SC1



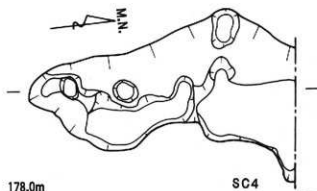
178.0m

SC2



178.0m

SC3

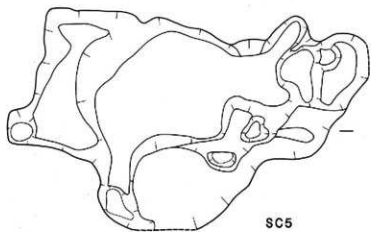


178.0m

SC4

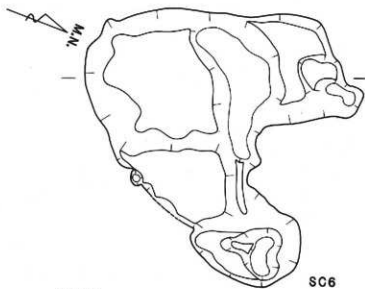


第58圖 SC1・SC2・SC3・SC4 (S=1/30)



SC5

177.8m

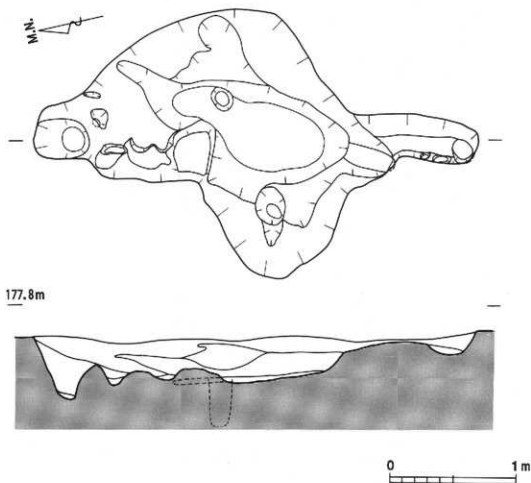


SC6

177.8m



第59図 SC5・SC6 (S=1/30)



第60図 SC 7 (S=1/30)

SB 2 (第57図)

SB 1の西に隣接する。桁行2間梁行2間の総柱建物であるが、桁行はSB 1と同様調査区外へ南方に延びる可能性がある。棟方位はN 7° EでSB 1と僅かに主軸をずらす。規模は東側柱の桁行が4.25 mで、柱間隔は北から1間目が2.25 m、2間目が2.00 mを測る。西側柱と中央柱の桁行はともに4.30 mで、柱間隔は北から1間目が2.25 m、2間目が2.05 mである。東側柱列と西側柱列とは平行ではなく南寄りに若干狭くなる。梁行は北側柱が5.45 mで、柱間隔は西から1間目が2.80 m、2間目が2.65 mを測る。中央柱は5.40 mで、柱間隔は西から1間目が2.80 m、2間目が2.60 mである。南側柱は5.15 mで、柱間隔は西から1間目が2.75 m、2間目が2.40 mである。柱穴の掘形は大半が径0.38 m前後の円形を呈するが、西側柱列の北から第3柱は径が0.55 mと大きい。東側柱の北から第2柱と南側柱列のすべてが二段掘りを呈する。なお、南側柱の西から第2柱は1つの掘形に対し2つの柱穴が掘られており、切り合いも確認できなかったため、建築時の柱の据え直しの跡とも考えられる。柱穴の検出面からの深さは0.25 m～0.40 mを測る。

SC 1 (第58図)

A区の西端で検出した。土坑の東側が楕円形ピットにより切られている。規模は長軸1.50 m、短軸推定1.30 mの不整形の土坑である。検出面から最深部までは0.60 mを測る。壁面は小さなテラスを

形成しながら底面に至る摺鉢状を呈する。埋土は底面に黒褐色土と黒色土が混じり合う層が堆積し上部に黒褐色土と暗褐色土の混じり合う層、黒褐色土層、暗褐色土層、黒褐色土層、暗褐色土層、黒色土層の順に堆積している。

SC 2 (第58図)

A区の中央部南寄りで検出した。長軸1.40m、短軸1.30mの不整形円形を呈する。最深部までは0.40mを測る。検出面から底に向かって北西側と南東側にそれぞれ1段のテラスをつくり中央の最深部に至る。埋土は底面から黒褐色土と黒色土が混じり合う層、黒褐色土層、暗褐色土層の順に堆積している。

SC 3 (第58図)

A区の中央部北端で検出した土坑で、北半分は調査区外に広がり全形は不明である。南北に長く、東西長は1.05mを測る。底面までの深さは0.40mを測る。掘り込みは逆台形を呈し、底面は比較的平坦であるが、東壁面に検出面からの深さ0.50mの小ビットが穿たれている。埋土は底面から褐色土に黒色土ブロックが混入する層、黒褐色土層、暗褐色土層、黒褐色土層の順に堆積している。

SC 4 (第58図)

B区の西端で検出した南北に長い落ち込みで、北側は調査区外に広がり全形は不明である。東西幅は1.00mで、底面までの深さは最深部で0.30mを測る。底面は平坦面を形成する。埋土は底面から褐色土に黒褐色土ブロックが混入する層、黒褐色土層、暗褐色土層の順に堆積している。

SC 5 (第59図)

B区の西端で検出した落ち込みで、SC 4の南側に隣接する。長軸2.90m、短軸1.70mの不整形を呈する。検出面から最深部までは0.40mを測る。検出面から底に向かって西側と南側にそれぞれ1段のテラスをつくり中央の底面に至る。底面は凹凸が著しい。埋土は底面から暗褐色土層、暗褐色土と黒褐色土の混じり合う層、暗褐色土層の順に堆積している。

SC 6 (第59図)

B区の中央部で検出した。南北長2.00m、東西長2.20mの不整形を呈する。土坑の東壁際には長軸0.90m、短軸0.60mの不整形円形土坑が掘り込まれている。検出面から最深部までは0.40mを測る。検出面からは階段状にテラスを形成し中央の底面に至る。埋土は底面から暗褐色土と黒褐色土の混じり合う層、暗褐色土層、褐色土層の順に堆積している。

SC 7 (第60図)

B区の東端で検出した。南北長2.40m、東西長1.80mの不整形を呈する。検出面からの深さは0.40mを測る。壁際に小さなテラスを形成しながら底面に至る。底面は凹凸が著しい。埋土は下部に暗褐色土と黒褐色土の混じり合う層、上部に暗褐色土層が堆積している。

第7表 母智丘原第2遺跡出土石器観察表

遺跡番号	類別	器種	出土地点	位置 (cm)		手法・調整・文様ほか	色調		土の付着	備考
				口徑	底徑		外面	内面		
254	縄文土器	浅鉢 胴部	IV層			貝殻赤褐色	貝殻赤褐色、指痕	橙	明赤褐色	2mm以下の透明赤褐色粒 1mm大の黒色光沢粒
255	縄文土器	浅鉢 胴部	IV層	(8.4)		前方向の貝殻赤褐色ナゲ	指ナゲ、指痕	褐色	明赤褐色	1.5mm以下の黒・黒・乳白色粒、透明粒
256	土師器	壺 口縁一部分	SA1 Ⅱ層	(10.4)		横ナゲ、工具痕、指痕、炭化物付着	指ナゲ、指痕	橙	黄褐色	3mm以下の褐色粒 2mm以下の透明・黒色光沢粒
257	土師器	壺 胴部	SA1 Ⅱ層			横ナゲ、指ナゲ、指痕、黒炭	横・前方向のナゲ、指痕	にぶい赤褐色	にぶい橙	2mm以下の黄褐色粒 1.5mm以下の透明・黒色光沢粒
258	土師器	壺 胴部一部分	SA1 Ⅱ層	(6.0)		横・前方向のヘラミダギ、ナゲ、黒炭	ナゲ、黒炭、炭化物付着	にぶい黄褐色	淡黄褐色	2mm以下の黒色光沢粒、黒・灰白色粒、1.5mm以下の透明粒
259	土師器	壺 口縁部	Ⅲ層	(23.4)		横ナゲ、工具痕、黒炭、炭化物付着	横ナゲ、工具痕、黒炭	淡黄褐色	淡黄褐色	4mm以下の褐色粒、3mm以下の褐色光沢粒 2mm以下の透明・黒色光沢粒 1mm以下の透明赤褐色粒
260	土師器	壺 胴部	SA1 Ⅱ層			横方向のナゲ、黒炭	横ナゲ、工具痕	淡黄褐色	橙	5mm以下の褐色粒、4mm以下の灰褐色粒 2mm以下の透明・黒色光沢粒
261	土師器	壺 胴部	Ⅲ層			横ナゲ、指ナゲ、黒炭、スス付着	横ナゲ、工具痕、黒炭	淡黄褐色	淡黄褐色	2mm以下の黒・褐色粒、2mm以下の灰褐色粒、透明・黒色光沢粒
262	土師器	壺 胴部一部分	Ⅲ層	(6.0)		横・前方向のナゲ、黒炭、スス付着	横・前方向のナゲ、工具痕	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の褐色粒、透明・黒色光沢粒 3mm以下の褐色粒
263	土師器	壺 口縁一部分	Ⅲ層	(25.0)		横ナゲ、指ナゲ、指痕、黒炭、スス付着	ナゲ、横ナゲ、指ナゲ、粘土の層目	にぶい黄褐色	淡黄褐色	3mm以下の黒・灰・灰白色粒、透明粒
264	土師器	壺 口縁一部分	Ⅲ層			横ナゲ、指痕、ナゲ、炭化物、スス付着	ナゲ、指痕	にぶい赤褐色	橙	3mm以下の赤褐色粒 2mm以下の透明・灰白色粒
265	土師器	壺 口縁部	Ⅲ層			横ナゲ、貼付突起、スス付着	横ナゲ	にぶい赤褐色	灰褐色	2mm以下の黒・灰白・褐色粒 1.5mm以下の透明粒
266	土師器	壺 口縁部	Ⅲ層			横ナゲ、指痕、スス付着	ナゲ、指痕	にぶい赤褐色	橙	2mm以下の赤褐色・黒・淡黄褐色粒 0.5mm以下の透明粒
267	土師器	壺 口縁部	Ⅲ層			横ナゲ、スス付着	丁寧な横ナゲ	褐色	灰黄褐色	3mm以下の灰褐色粒 2mm以下の黒・乳白色粒
268	土師器	壺 胴部一部分	Ⅲ層	(6.7)		横ナゲ、指ナゲ、黒炭、スス付着	指ナゲ、黒炭	にぶい橙	にぶい橙	4mm以下の淡黄褐色粒 3mm以下の赤褐色・灰白・褐色粒 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒
269	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(5.9)		横方向のナゲ、指痕	ナゲ	にぶい橙	灰	3mm以下の赤褐色・赤褐色・黒・灰・乳白色粒 2mm以下の透明・黒色光沢粒
270	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(6.5)		横方向のナゲ、指痕	ナゲ、指痕、黒炭	にぶい橙	灰	3mm以下の黒・褐色粒 1mm以下の灰・乳白・赤褐色粒、褐色・透明光沢粒
271	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(8.0)		横ナゲ、指痕	横ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の灰白・褐色粒 1mm以下の黒・灰・乳白色粒、透明・黒色光沢粒
272	土師器	壺 胴部一部分	Ⅲ層			前方向のヘラミダギ、黒炭	指ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の褐色粒、黒色光沢粒 1mm以下の白色粒、透明光沢粒
273	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(6.0)		ヘラミダギ、黒炭	斜削の烏黒炭不明	にぶい黄褐色	褐色	4mm以下の灰白・黒・灰褐色粒 2mm以下の黒色光沢粒 1mm以下の透明粒
274	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(7.5)		ナゲ、黒炭、粘土の返り、スス付着	ナゲ	にぶい黄褐色	黒褐色	3mm以下の透明・灰褐色粒 2mm以下の黒・灰白色粒 1mm以下の透明赤褐色粒
275	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(6.2)		ナゲ、粘土の返り	横方向のナゲ目、指痕	橙	橙	3mm以下の褐色粒 2mm以下の乳白・褐色粒、透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒
276	土師器	壺 口縁一部分	Ⅲ層				丁寧な横ナゲ	にぶい黄褐色	淡黄褐色	1.5mm以下の黒・灰白色粒
277	土師器	壺 口縁一部分	Ⅲ層				丁寧なナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の黒・灰・灰白・赤褐色粒
278	土師器	高台付筒 口縁部	Ⅲ層	(12.7)		横・前方向のナゲ	丁寧なナゲ	橙	橙	3mm大の赤褐色粒を1粒 2mm以下の黒・赤褐色・灰白・乳白色粒、透明・黒色光沢粒 3mm以下の褐色粒
279	土師器	高台付筒 胴部	Ⅲ層			横ナゲ	丁寧なナゲ	にぶい黄褐色	にぶい橙	2mm以下の褐色粒、透明粒 2mm以下の褐色・透明粒 1mm以下の褐色光沢粒
280	土師器	高台付筒 胴部	Ⅲ層			横ナゲ、指痕	横ナゲ、指痕	にぶい橙	にぶい橙	4mm大の黄褐色粒を1粒 1mm以下の黒・灰白・褐色粒、透明・黒色光沢粒
281	土師器	壺 胴部	Ⅲ層	(6.5)			丁寧なナゲ	にぶい黄褐色	淡黄褐色	1.5mm以下の黄褐色・赤褐色・灰褐色粒 1mm以下の透明赤褐色粒
282	須石土器	壺 胴部	Ⅲ層			前方向に平行ナゲ、一部自然削付着	同心円の直徑黒炭ナゲ	黒褐色	黄褐色	4mm以下の乳白色粒
283	須石土器	壺 胴部	Ⅲ層			前方向に平行ナゲ、自然削付着	同心円の直徑黒炭ナゲ	褐色ナゲ	灰	4mm以下の白色粒 1mm以下の褐色粒

第8表 母智丘原第2遺跡出土石器計測表

レイアウト番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
284	Ⅲ層	磨石	7.85	5.6	4.7	140	滑石質灰岩	
285	Ⅲ層	台石	18.3	15.2	4.8	2,190	輝石安山岩	

第5節 まとめ

本遺跡の調査は宿舍建設予定地のための調査であったため、遺跡全体の規模を把握するには至らなかった。そのうえ攪乱土坑などの影響を少なからず受けており、遺構の形態を明らかにできなかったものもある。しかし、狭小な調査範囲にも拘らず比較的多くの遺構が集中して確認できたことは、今後の当地域の遺跡の全体像を検討していくうえで貴重な資料を提示することができたといえよう。以下、検出した遺構と出土土器について簡単にまとめてみる。

・土器について

縄文土器の深鉢、土師器壺・壺・高坏・高台付碗・須恵器甕が出土した。

縄文土器は深鉢の胴部と底部が2点のみ出土した。器形および調整が縄文時代後期の土器の特徴を備えており、おそらく市来式土器の範疇に入るものと思われるが、ともに断片的な資料であるため明言は差し控えたい。

土師器については甕が出土の大半を占める。これらもほとんどが小破片であるが、甕の口縁部形態には若干のバリエーションが認められる。特徴についてまとめてみると、口縁部と胴部の境に貼付突帯をもつものともたないものがあり、前者には口縁部が直線的に立ち上がるもの、内湾するもの、同じく内湾するが口縁部を肥厚させ下端部に刻目突帯を貼り付けるものの3タイプがある。これらの口縁をもつ甕は県内では妙見遺跡や荒迫遺跡などで頻例が報告されている。このうち妙見遺跡では竪穴住居跡内から須恵器を伴って出土しており、6世紀中頃の年代観が与えられている。

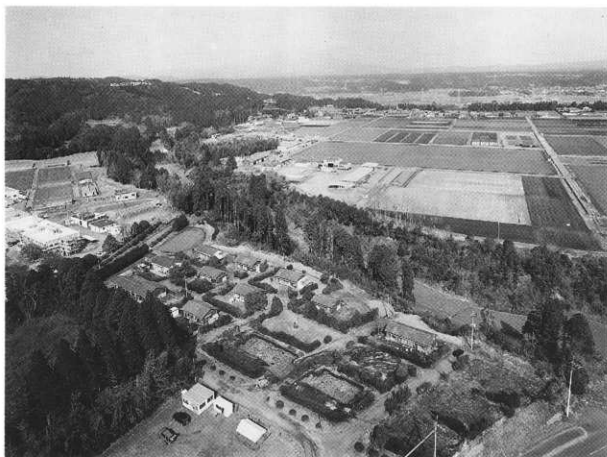
・遺構について

竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、土坑7基、その他ピット群が確認された。竪穴住居は4本柱の隅丸方形プランで壁帯溝を廻らす。住居内からは直口する口縁の下位に刻目突帯を貼り付ける甕が出土している。前述の口縁部が肥厚した突帯甕よりも若干古い様相を呈するものである。ただし、遺物のほとんどは床面から浮いた状態で出土しており、共存する遺物も少ないため明確な時期の特定は困難である。掘立柱建物跡2棟は棟方向がほぼ同じで隣接するが、一棟は長棟構造をとり一棟は総柱建物構造である。共存する遺物がないため時期の特定を行なうには判断材料に欠ける。土坑7基についてはいずれも御池ボラ直上で検出したものであるが、御池ボラ直上の層が埋土であることも時期決定の判断材料としてはもの足りない。

(註)

- (1)『野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡』九州縦貫自動車道建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書 第2集 宮崎県教育委員会 1994
- (2)『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集 1998

圖 版



母智丘原第2遺跡透景



A区Ⅲ層遺構検出状況



A区Ⅲ層遺物出土状況



A区Ⅲ層遺構完掘状況



A区Ⅴ層遺構完掘状況



B区Ⅲ層遺物出土狀況



B区Ⅴ層遺構検出狀況



B区Ⅲ層遺構完掘狀況



B区Ⅴ層遺構完掘狀況



SA1



SB1



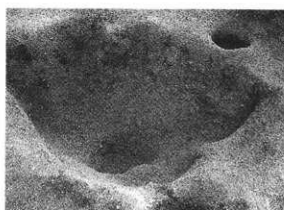
SB2



SC1



SC2土層断面



SC 2



SC3



SC 4



SC 6 検出状況



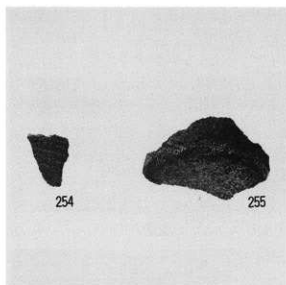
SC 6



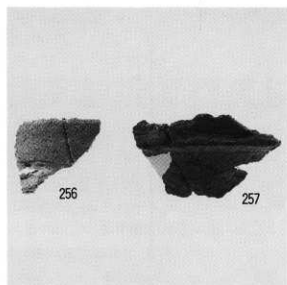
SC5



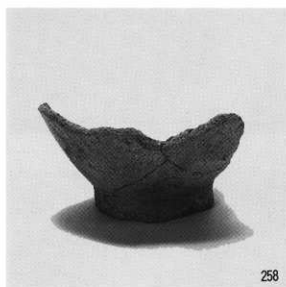
SC7



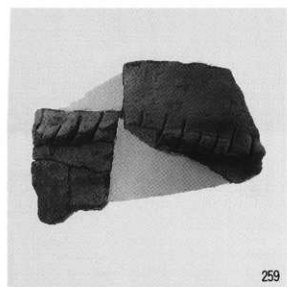
IV層出土遺物



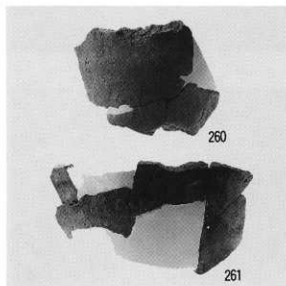
S A 1 出土遺物



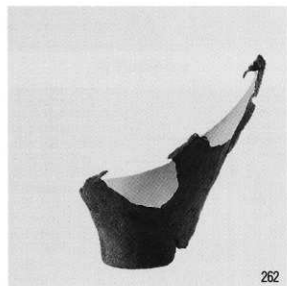
S A 1 出土遺物



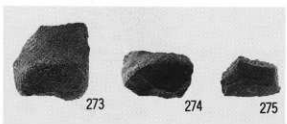
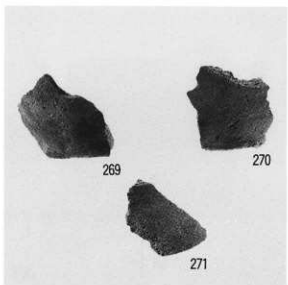
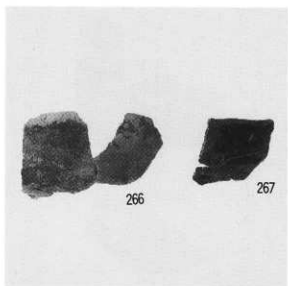
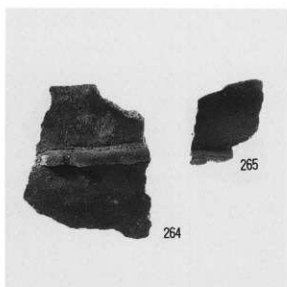
S A 1 出土遺物



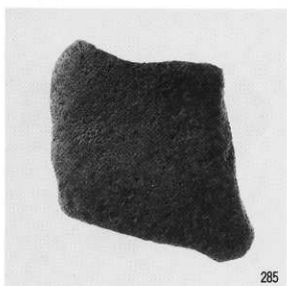
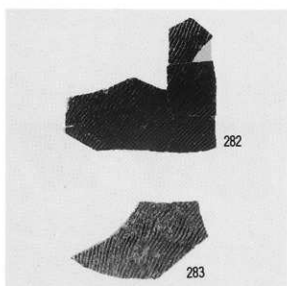
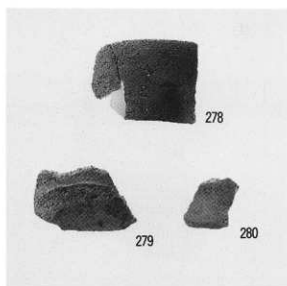
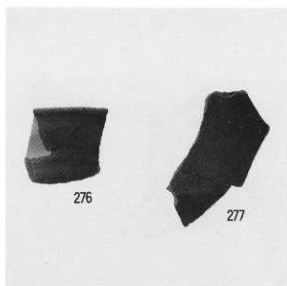
S A 1 出土遺物



S A 1 出土遺物



Ⅱ層出土遺物



II 層出土遺物

報告書抄録

フリガナ	カミマキダイ2イセキ	モチオバルダイ2イセキ				
書名	上牧第2遺跡	母智丘原第2遺跡				
副書名	九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第18集					
編集者名	久木田浩子 高橋 誠					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0053 宮崎市神宮2丁目4番4号					
発行年月日	1999年3月31日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
カミマキダイ2 上牧第2	ミヤコノシロウシ 都城市横市町	31°45'05" 付近	131°00'50" 付近	1997.8.18 \ 1997.11.17	1,800	農業関連
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落 生産遺跡	縄文時代 古墳時代 古代 中世・近世	竪穴住居 2 掘立柱建物 1 土坑 4 溝状遺構 7	縄文土器、石器 土師器、陶磁器 銭貨	縄文時代中期後葉から 後期初頭の遺物を有する 竪穴住居		
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
モチオバルダイ2 母智丘原第2	ミヤコノシロウシ 都城市横市町	31°44'53" 付近	131°1'1" 付近	1998.1.19 \ 1998.2.13	240	農業関連
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居 1 掘立柱建物 2 土坑 7	縄文土器 弥生土器 須恵器、土師器 石器	壁帯溝を有する竪穴住居		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集

上牧第2遺跡 母智丘原第2遺跡

九州農業試験場畑地利用部施設整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成11年3月31日
編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0053 宮崎県宮崎市神宮2丁目4-4
TEL 0985-21-1600 FAX 0985-25-2634
印刷 田中印刷有限公司
〒880-0022 宮崎市大蔵3丁目110
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285
